

ロシア・東欧学会 *Newsletter* No.10

The Japanese Association for Russian and East European Studies

ロシア・東欧学会第 34 回大会は 2005 年 10 月 15/16 日，西南学院大

2004 年 10 月 9 日に開催された 2004 年度第 2 回理事会において，ロシア・東欧学会第 34 回（2005 年度）大会は，2005 年 10 月 15/16 日，福岡の西南学院大学で開催されることが決まりました。ロシア・東欧学会は初めて九州で大会を開催することになりました。会員の積極的な参加を期待しています。

年会費，維持会費の納入と ご寄付のお願い

大会でも多くの方のご入会をありがとうございました。2004 年度までの会費をお支払いいただけていない方につきましては，会費の納入をお願いいたします。2004 年 10 月の大会で承認された方々につきましては，恐縮ですが，2004 年度の会費をお支払い下さい。一般会員 8000 円，院生会員 5000 円，法人会員 20000 円，寄付はおいくらでもお受けしております。

大会で承認されましたように，2005 年度より，会費は値上げとなりました。一般会員 1 万円，法人会員 5 万円となりますので，よろしく願います。院生会員は，5000 円の据え置きとなります。

1 年以上未納の方には，雑誌が送られなくなります。3 年未納が続きますと，ご連絡の上，会員から除籍されますのでくれぐれもご注意ください。お忙しいとは存じますが，振込みをどうぞよろし

くお願いいたします。

会費について不明な点がありましたら，事務局までお問い合わせ下さい。

ロシア・東欧学会第 33 回 (2004 年度) 大会の概要

ロシア・東欧学会第 33 回(2004 年度)大会が，2004 年 10 月 8 日(金)～10 日(日)，北海道大学において開催されました。

各セッションの概要を座長を務めた会員にまとめていただきましたのでご報告します。

10 月 8 日(金) 午後

特別シンポジウム

北海道大学スラブ研究センター大会議室(423 号室)

13:00-15:00 「日露戦争と民族」

(司会) 原暉之

(報告) E. パワシ=ルトコフスカ(ワルシャワ大)

「日露戦争とポーランド」

(報告) S. エセンベル(ボガジチ大学)

「日露戦争とトルコ」

(報告) 稲葉千晴(名城大学)

「日露戦争とフィンランド」

この特別シンポジウムでは，3 報告がいずれも日本語で行われた。エヴァ・パワシ=ルトコフスカ会員の報告は，最大の分割当事国であるロシアからの独立回復をめざす日露戦争中の J・ピウスツキや R・ドモフスキの運動を分析し，両大戦間期にかけての日本・ポーランド関係に言及した。セルチューク・エセンベル会員の報告は，スルタン・アブデュル・ハミト 2 世に代表されるトルコ・

エリート層の日本 = 近代化モデルと日本・トルコ間の非公式外交関係の特殊性に注目した。稲葉千晴会員の報告は、ロシアによる自治権縮小を契機に高まったフィンランドの抵抗運動とこれに加担した日本軍の関わり（明石工作）を論じた。「日露戦争と民族」というタイトルからは、日本の対ロシア勝利が諸民族の「覚醒」に与えた影響という論点を前面に押し出す目的の企画であるかのように見えるが、3 報告は必ずしもそうした通説的な筋書きで共通していたのではない。むしろ各国に内在する問題の多様性、特殊性ゆえに日露戦争の「世界史的意義」なるものを安易に語ることはできないというのが全体を聞いた印象であった。（原暉之）

10月8日（金）午後

特別シンポジウム

北海道大学スラブ研究センター大会議室（423 号室）

15:30-17:30 「ヴォルガ地方広域イスラム政治：

宗務局の乱立と宗教指導者」（露語使用通訳付）

（司会）北川誠一（東北大学）

（報告）N. ムハリヤーモフ（カザニ・エネルギー大学）

「ヴォルガ地方のイスラム：未完の政治化、それとも遅れてきた政治化？」

（報告）R. ガリヤーモフ（バシコルトスタン農業大学）

「イスラム指導者：社会学的背景と人脈」

（通訳・討論）松里公孝（北海道大学）

10月9日（土）午前

自由論題 「ロシアの文学と文化」

人文・社会科学総合教育研究棟 W101 号室

（座長）川端香男里（川村学園女子大学）

9:30-10:15 第 1 報告

（報告）臼山利信（筑波大学）

「ポスト・ソヴィエト時代のロシア社会における英語文化の影響について」

（討論）鈴木淳一（札幌大学）

10:15-11:00 第 2 報告

（報告）土田久美子（青山学院大学・院）

「源氏物語のロシア語訳と『ものの哀れ』をめぐって」

（討論）鈴木淳一（札幌大学）

11:00-11:45 第 3 報告

（報告）岩本和久（稚内北星学園大学）

「現代ロシア文学と麻薬」

（討論）望月哲男（北海道大学）

11:45-12:30 第 4 報告

（報告）中村唯史（山形大学）

「現代ロシアにおける作家像の再構築」

（討論）望月哲男（北海道大学）

4 人の報告者を迎えて文化部門で第 1 セッションを構成することができたことは画期的なことだった。いずれの報告も、ちまちました作家論や作品論という伝統的な狭い文学研究の枠を超えて、より広い視角から文学・文化・社会を捉えようとした点が高く評価できる。

臼山利信会員の報告は、現代ロシア語における英語の影響を探りながら、ポスト・ソヴェト時代の社会変化の姿を抉り出す。

土田久美子会員の『源氏物語』のロシア語訳についての報告は、日露比較文学の研究として内容のあるものであったが、ロシアの日本研究者の系譜を探りながら、翻訳の面で現れる国民的ないし民族的感性が具体的に示されたことが興味深かった。

岩本和久会員の報告は、現実にソ連崩壊前後からロシア・東欧学会を蝕んでいる麻薬の問題と文学の問題を取り上げながら、ド・クインシー依頼の欧米の「麻薬文学」と現代ロシアの麻薬文学とを比較して、ロシア作家がロシア文学の伝統に従って社会性・歴史性の重視の方向に向かっていることを指摘した。

中村唯史会員の報告は、通例「西欧派」の開祖と見られているチャアダーエフの生誕二百年を機会に展開された論議を検討しつつ、現代ロシア・東欧学会においても依然として重要な思想的課題とされている西欧派とスラヴ派の対立の構図を明らかにした。

全体に、質問やコメントも充実していて、聴衆にとってもいろいろ学べるところがあったが、それ以上に報告者にとって実り多いセッションであったと思う。（川端香男里）

10月9日（土）午前

自由論題 「ロシアの軍事・安全保障」

人文・社会科学総合教育研究棟 W102 号室

（座長）松井弘明（大東文化大学）

9:30-10:15 第1報告

（報告）岡田美穂（青山学院大学・院）

「軍備管理合意違反の国内的条件 - ソ連/ロシアと生物兵器禁止規範」

（討論）中野潤三（鈴鹿国際大学）

10:15-11:00 第2報告

（報告）笹岡伸矢（明治大学・院）

「非民主主義体制の崩壊におけるクーデターと軍隊 - 体制移行期のソ連を事例に」

（討論）三井光夫（世界政経調査会）

11:00-11:45 第3報告

（報告）友森武久（青山学院大学・院）

「ロシア海軍の現状と今後の動向」

（討論）小泉直美（防衛大学校）

11:45-12:30 第4報告

（報告）中西啓種（航空自衛隊）

「プーチン政権の兵器輸出戦略 - 対中戦闘機輸出を事例として - 」

（討論）岩下明裕（北海道大学）

岡田美穂会員の報告は、1972年の生物兵器禁止条約（BWC）調印以来の、ソ連・ロシアの生物兵器禁止条約違反について、「新思考」外交以前と以後、ソ連崩壊後の3期に分け、それぞれの時期における政治と軍の関与を分析したものである。これに対し、討論に立った中野潤三会員は、ロシアの軍備管理協定遵守については、米国等他の大量破壊兵器保有国の動向に左右される面があり、これについてもさらに研究する必要があると指摘した。

笹岡伸矢会員の報告は、クーデター発生要因に

関する分析枠組みは社会主義体制にも応用可能か、という問題関心から、集団的利益、制度的構造など6つの一般的理論をソ連の1991年8月クーデターに適用し検証したものである。討論者の三井光夫会員は、意欲的な論文であるが、クーデターを引き起こす一般的要因 - 内的要因（3個）と外的要因（3個）に、8月クーデターの事象を結びつけただけの論証で終わっていると指摘した。

友森武久会員の報告は、ロシアは今後自国領土外での国家権益を防衛するため海軍力を使用するという意思を表明しているが、ロシア海軍力は大きく低下しており、意思と実態との間に大きなギャップがある、これこそが脅威であり、世界にとっての不安定材料であるというものであった。討論者の小泉直美会員は、報告は、海軍活動に関する2つの公式文書の読解と、実際の海軍の装備・運用状況の調査から、貴重な分析を提起してはいるが、文書公表の背景、政軍、あるいは軍内関係といった政治分析が不十分であるとし、「理想と現実のギャップが、ロシア周辺の世界情勢を不安定化させる」との結論の根拠が十分には示されていないと指摘した。

中西啓種会員の報告は、プーチン政権下でロシアの兵器輸出は活発化しており、その約50%は対中国輸出であるが、中国は潜在的にロシアにとって脅威であるとの認識も根強く、最新鋭戦闘機は輸出されていないというものであった。討論者の岩下明裕会員は、ロシアは中国に質の悪い兵器を、インドに質のよい兵器を渡していると言われてはいるが、その質の違いや安全保障への影響について研究したものは少なく、本報告は画期的研究であると述べた。（松井弘明）

10月9日（土）午後 14:00-16:30

共通論題 「新時代のロシア・東欧」

人文・社会科学総合教育研究棟 W103 号室

（座長）宇多文雄（上智大学）

（報告）永綱憲悟（亜細亜大学）

「ポチョムキン・デモクラシー - プーチンの限界か - 」

(報告) 上垣彰 (西南学院大学)

「ロシア経済の回復, その原因と今後の展望」

(報告) 仙石学 (西南学院大学)

「ポスト社会主義の社会政策 - 中東欧諸国における社会政策の変容の比較分析 - 」

(討論) 上野俊彦 (上智大学), 宮本勝浩 (大阪府立大学), 家本博一 (名古屋学院大学)

共通論題 「新時代のロシア・東欧」のセッションでは, ロシア政治, ロシア経済, 東欧社会の3分野に関する発表があり, 各分野の3名が予定討論をおこなった。

上垣彰会員は「ロシア経済の回復, その原因と今後の展望」の中で, ロシア経済実績が示す最近の好調の理由と実態を明らかにし, 分析の主要点を絞ったうえで, 将来展望を短期と中期に分けて試みた。そして「石油価格の高騰と低為替によってもたらされたロシア経済の好調は, 短期的には挫折する可能性は少ないが, 中期的な観点からいうと, ロシアのモノカルチャー経済構造からの脱却は, 大きな困難をとまなうので, 政治の腐敗と混乱は避けられないだろう」という結論を示した。細かい専門的な分析と, 長期的, 全体的な展望を両立させた報告であった。

永網憲悟会員は「ポチョムキン・デモクラシー: プーチンの限界か」と題し, プーチン体制の性格がどんなものかに関する各種の見方を紹介し, ふたつの国政選挙に見られた民主主義基準からの逸脱を指摘し, 「擬態」としての民主主義, という観点を導入した。そしてロシアの民主主義が見せかけの, ポチョムキン的なものとなっているのは, プーチン自身の個性あるいは政治手法が生み出したものである, と主張した。

仙石学会員は「ポスト社会主義の社会政策: 中東欧諸国における社会政策の変容の分析」において, チェコとポーランドの社会政策と環境政策を取り上げ, 政策の変遷とその規定要因を探り, 「政党間関係や欧州化の作用よりも, 社会主義期以

降の政策遺産が影響を与えている可能性が高い」という結論に達している。

いずれも明快な分析と結論をもつ, 説得力の高い報告であったが, 上野俊彦, 宮本勝浩, 家本博一の討論者はかなり対立する見解を示し, 会場からも鋭い問題提起が続いて, 専門性の高い議論が交わされた。(宇多文雄)

10月10日(日)午前

自由論題 「ロシアの政治と経済」

人文・社会科学総合教育研究棟 W101 号室

(座長) 横手慎二 (慶應義塾大学)

9:30-10:15 第1報告

(報告) 金子利喜男 (札幌大学)

「世界市民法廷とロシア関係の事件」

(討論) 森下敏男 (神戸大学)

10:15-11:00 第2報告

森岡真史 (立命館大学)

「ボリス・ブルツクスの生涯と著作」

(討論) 小島修一 (甲南大学)

11:00-11:45 第3報告

(報告) 伏田寛範 (京都大学・院)

「ロシアにおける軍需産業政策の策定機構」

(討論) 丹羽春喜 (大阪学院大学)

11:45-12:30 第4報告

小野田悦子 (法政大学・院)

「ソビエト赤軍形成過程における日本柔道の役割 - 『ロシア柔道の父』オシェブコフの足跡を辿る - 」

(討論) 原暉之 (北海道大学)

第1報告は, 金子利喜男会員の実践的活動に基づくもので, 国家を代表することのない市民の判断を国際紛争の解決に反映させたいとする熱意に発するものであった。討論者の森下敏男会員は, 法廷の実現可能性とその有効性について疑問だと述べた。

ついで森岡真史氏報告は, 近年注目されるようになったブルツクスの学術活動を生涯にわたって捉え, 再評価することを目指すものであった。

討論者の小島修一会員は、森岡報告の周到な文献整理と全体像の提示を目指す姿勢を高く評価した。会場からも多くの質問が出され活況を呈した。

次の伏田寛範氏報告は、ペレストロイカ以降、ロシアの軍需産業は政治・経済主体として行動するようになり、軍需産業政策の策定過程に積極的に関わるようになり、1990年代には、政策は政府官僚組織、軍需企業など各主体の相互関係によって規定されていると論じた。これに経済的観点から討論者の丹羽春喜会員がコメントをした。活発な質疑が続いた。

最後に、小野田悦子氏報告は日本の柔道がオシェブコフという人物を通じてロシアに伝えられたという事実を示し、オシェブコフの逮捕に至る足跡を丹念にたどるものであった。討論者の原暉之会員は日露関係の細部を明らかにする作業として研究を高く評価した。(横手慎二)

10月10日(日)午前

自由論題 「東欧・ロシアの外交」

人文・社会科学総合教育研究棟 W102 号室
(座長) 小山洋司 (新潟大学)

9:30-10:15 第1報告

(報告) 荻野晃 (大阪外国語大学)

「カーダール時代のハンガリー外交 - 連続性と変化 - 」

(討論) 羽場久尾子 (法政大学)

10:15-11:00 第2報告

(報告) 中林啓修 (慶應義塾大学・院)

「司法内務分野における EU - 中欧協力関係 - 民主化支援・加盟前支援から協力へ」

(討論) 羽場久尾子 (法政大学)

11:00-11:45 第3報告

(報告) 馬場優 (立命館大学)

「第1次バルカン戦争とセルビアのアドリア海進出問題」

(討論) 柴宣弘 (東京大学)

11:45-12:30 第4報告

(報告) ドミトリー・クリフツォフ (北海道大学・院)

「ロシア外交にとってのアメリカ」

(討論) 斎藤元秀 (杏林大学)

荻野晃会員の報告は、ソ連を中心とする社会主義諸国の利益を優先させたラーコシ、自国の利益を優先させたナジ、両者の対外政策が破綻した経緯を踏まえ、双方の利益の共生をはかる60年代半ば以降の改革期におけるカーダール政権の外交路線が、ハンガリー事件とそれに続く社会主義体制の再建、強化を経て確立したと論じた。とくに68年のチェコスロヴァキア改革の武力弾圧への加担は、自国の穏健な改革路線を継続させるためになされた苦渋な決断であったと論じた。

中林啓修会員の報告は、民主化支援・加盟前支援として進められてきた「司法・内務」分野でのEU-中東欧諸国間の関係が、東方拡大後の今日どのような協力関係を形成したのかを、とくに「社会の安全」という側面に注目して論じた。

馬場優会員の報告は、第1次バルカン戦争(1912年10月-1913年5月)で勢力を拡大したセルビアのアドリア海進出の要求を、オーストリア=ハンガリー帝国が外交的努力(アルバニア国家創設)によって阻んだと論じている。オーストリアの外交文書など、豊富なドイツ語文献(部分的に英語文献も使用)を用いてこの問題を論じたのであるが、ロシアやセルビアの資料を読めば、また違った見方もできるのではないかと感じられた。

クリフツォフ会員の報告は、「9.11事件」及びイラク戦争の文脈でのロシアとアメリカとの関係がロシア人の目にどのように映っているかを、ロシアのメディアの論調を分析することによって、明らかにしたものである。

以上4人の若手研究者の報告は、いずれも豊富な資料によって裏づけられた意欲的な研究であった。

10月10日(日)午後 14:00-16:00

共通論題 「ロシア・東欧と米国のユニラテラリズム」

人文・社会科学総合教育研究棟 W103 号室
 (座長) 木村汎 (拓殖大学)
 (報告) 小澤治子 (新潟国際情報大学)
 「ロシアの外交戦略と米国のユニラテラリズム」
 (報告) 林忠行 (北海道大学)
 「東欧と米国のユニラテラリズム - 東中欧諸国のイラク戦争への対応を中心に -」
 (討論) 松井弘明 (大東文化大学), 六鹿茂夫 (静岡県立大学), 古矢旬 (北海道大学)

報告者 2 人 (小澤治子会員, 林忠行会員) の口頭報告は, おおむね既提出の報告要旨と同一であったので, ここでは討論者やフロアーとのやりとりのなかから, 要約者がとくに興味深いと思われた点を記す。

まず討論者の 3 人全員が「ユニラテラリズム」概念の定義と起源について, 主として小澤報告を補う形で論じた。彼らの意見を総合すると, 「絶大なる権力 (主として軍事力) を用い, 相手国や他の国々の意向を忖度することなく, 一方的に行う行為」という定義になろう。米国の unilateralism はつねに批判の対象となったわけではなく, かつてはそれが誉められ望まれたりしたこともあったという (古矢旬会員)。フロアーから, 現代では情報の独占や諜報活動分野での単独主義 (ユニラテラリズム) に注目することが必要との指摘もなされた (丹羽春喜会員, 岩田昌征会員)。

次に, ユニラテラリズムと関連し, あるいは対抗する概念としての「一極主義」, 「多極主義」, 「グローバリズム」の観点から, ロシア外交が論じられた。小澤報告が「ロシアは米国のユニラテラリズムを利用し, あるいは牽制することによって多極世界の形成をめざす」(42 頁) とのべているからである。果してこれでは「米のユニラテラリズムと露の多極主義は完全に対立する関係となるのか」(松井弘明会員)。グローバリズムは, 実はロシアにとり具合悪いことだらけでロシア人は内心グローバル化を恐れているのではないかと (横手慎二会員), との鋭い指摘もなされた。

第三に, 小澤報告が米口は括弧付とはいえ「同

盟関係」(40 頁)にあるとのべるのは, 言い過ぎであり (斎藤元秀会員), 米口関係の対立面を見逃しているとの批判もなされた (袴田茂樹会員)。

林報告はほとんど批判の余地ないものであったが, 時間の都合上ヴィシエグレード 4 개국 (ポーランド, チェコ, スロヴァキア, ハンガリー) に対象をしぼっていた。そのために, ルーマニア, ウクライナ, ベラルーシなどの諸国の米国ユニラテラリズムへの対応についての補足説明 (六鹿茂夫会員) は, 有益であった。「新しい欧州 VS 古い欧州」の単純な二分法では捉え得ない (47 頁) との結論に対しては, 「様々な対立軸があり, より具体的に検証していくべき」とのコメントがなされた (羽場久子尾子会員)。(木村汎)

2004 年度第 2 回理事会開催

2004 年 10 月 9 日 (土), 北海道大学で 2004 年度第 2 回理事会が開催されました。袴田茂樹代表理事の挨拶のあと, 理事会では以下の報告および審議が行われました。なお, 理事会出席者は 28 名, 欠席 12 名でした。

1. 報告事項

(1) 会誌編集委員会報告では, 香川敏幸会誌編集委員長から, 会誌が 9 月に発行されたこと, 今号から表紙が一新されたこと, 会誌編集の今後の計画として, 1 年遅れの発行を是正し, 大会の共通論題・自由論題原稿を, 3 月 31 日に締め切り, 夏休み明けには発行したいという計画があること, ロシア・東欧学会年報投稿論文審査内規を変更したこと, などが報告されました。

(2) 事務局会務報告では, 羽場久子尾子事務局長から, 雑誌, 2004 年度名簿, News Letter No. 9 を 9 月中旬に同時発送すること, 名簿については来年度も発行予定であること, 2003 年度決算, 2004 年度予算報告, 新入会員, 退会会員, などについて報告がなされました。会員数は, 2004 年度大 1 回理事会 (2004 年 6 月) で承認された 44 名の新入会員に続き, 本理事会でも (p. 8 へ)

表1 2003年度決算 および2004年度予算

	2003年度予算	2003年度決算	2004年度予算
収入の部			
前年度繰越金	1,264,659	1,264,659	1,297,050
会費（注1）	1,890,000	2,110,000	1,930,000
個人	1,830,000	2,050,000	1,830,000
正会員	1,680,000	1,865,000	1,680,000
院生会員	150,000	185,000	150,000
団体	60,000	60,000	100,000
維持会費	24,000	136,000	24,000
寄付	250,000	88,000	250,000
利息	30	5	30
雑収入	20,000	10,295	20,000
収入小計	2,184,030	2,344,300	2,224,030
総計	3,448,689	3,608,959	3,521,080
支出の部			
大会費	300,000	300,000	300,000
年報発行費	1,000,000	1,114,050	1,000,000
年報印刷費	1,000,000	1,114,050	1,000,000
事業費（注2）	25,000	5,000	25,000
学術会議費用	40,000	30,000	40,000
事務局費（事務，謝礼）	30,000	20,570	100,000
事務用品・コピー代	50,000	45,267	61,000
会議費補助	660,000	612,279	600,000
選挙管理費	50,000	81,023	0
会員名簿印刷代	30,000	0	40,000
通信費	50,000	82,295	110,000
利息・手数料料金（注3）	30,000	21,425	30,000
予備費（注4）	200,000	0	200,000
支出小計	2,465,000	2,311,909	2,506,000
繰越金	983,689	1,297,050	1,015,080
総計	3,448,689	3,608,959	3,521,080

（注1）2004年度予算の個人会費額の算出は、納入率82%で試算。会費は、年報の発行、会議費補助、大会費で消え、後は繰越金を使う形となる。会費値上げの必要性あり。（注2）事業費は、JCREESおよび地域研究学会連絡協議会の負担金。（注3）利息・手数料は、事務局費の銀行手数料を、郵便振替払込料金と合わせたもの。（注4）予備費は、大会の際に施設使用料などが必要な場合の支出。

表2 2004年3月の時点での会員数と会費納入状況

	正会員	院生会員	法人会員	名誉会員	合計
会員数(名)	240	45	4	9	298
会費納入者数(名)	221	36	3	-	260
会費未納者数(名)	19	9	1	-	29
会費納入率(%)	92%	80%	75%	-	平均 87%

* 正会員に比べ、院生会員、法人会員の納入率が低め。

* 院生会員は、滞納が続く場合、住所も不明になってしまう可能性が高い。連絡を密に取る必要あり。

30名の入会が承認されたので、退会者の5名を差し引くと、327+25=352名となったことが報告されました。会費納入については、5-6年にわたる滞納分が、ほぼ一掃されたことが報告されましたが、年間の会費収入約220万円のほとんどは、年報(約100万円)、会議費(遠方から出席する理事の交通費を含み約66万円)、大会費(30-50万円)で消え、ほぼ毎年30万円程度の赤字となる構造になっていることについて、問題提起がありました。

(3) 対外関係

学会会議に関する報告では、担当の溝端佐登史理事から、大幅改革と学会議法の施行、会員の学協会からの推薦の廃止、任期の延長、定年制導入、研連の廃止、連携会員の導入、所管官庁の総務省から内閣府への変更、20期は2005年10月から発足することなどについての報告が行われました。

地域研究連絡協議会に関する報告では、担当の上野俊彦理事から、学会議の制度変更に伴い地域研究者の学際的な学協会が今後どのようにして学会議に意見を反映させていくのかが模索されている旨、報告がありました。

日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)については、担当の宇多文雄理事から、分担金が1学会2万円から3万円に値上げされるとの報告がなされました。

(4) 内村剛介『生き急ぐ』のロシア語訳については、袴田茂樹代表理事から、翻訳者、出版社、

補助金申請などの点で、もう少し進展を見たいこと、今後、どのようなものを紹介していくべきかについても討議していくことなどの報告がありました。

(5) その他として、袴田茂樹代表理事から、みちのく銀行大道寺会長からの電報の紹介があり、今後、法人会員をも積極的に拡大していく必要があるとの意見が述べられました。

2. 審議事項

(1) 2003年度決算会計監事(斎藤治子会員、中本信幸会員)による承認報告のあと、2003年度決算が承認されました。

(2) 2004年度予算が、羽場久子尾子事務局長の説明を受けたあと承認されました。

(3) 会費値上げについて、袴田茂樹代表理事より、個人会員(一般)が8,000円から1万円に、法人会員が1口2万円から5万円に、それぞれ値上げしたいとの提案があり、川端香男里理事(元代表理事)、上野俊彦理事(前事務局長)より、構造的赤字である以上、値上げせざるを得ない時期に来ているとの賛成発言があり、総会で承認を求めることになりました。

(4) 第34回(2005年度)大会は、福岡県福岡市の西南学院大学で開催されることが決まり、上垣彰理事に開催校代表としてご苦勞をおかけすることになりました。なお、第35回(2006年度)大会は東日本、第36回(2007年度)大会は西日本の予定で、開催予定校の検討に入っています。

表3 2004年度第2回理事会(2004年10月9日)において承認された新入会員(五十音順)

個人会員				
	氏名	所属	推薦者	
1	荒井 信雄	北海道大学	袴田 茂樹	林 忠行
2	安野 正士	上智大学	木村 汎	袴田 茂樹
3	石川 一洋	日本放送協会	名越 健郎	袴田 茂樹
4	梅津 哲也	日本貿易振興機構	袴田 茂樹	湯浅 剛
5	小野田 悦子	法政大学大学院生	上野 俊彦	羽場久シ尾子
6	河東 哲夫	前外務省	木村 汎	袴田 茂樹
7	工藤 仁子	防衛大学校大学院生	小泉 直美	角田 安正
8	小平 功	前外務省	田中 義具	羽場久シ尾子
9	小林 香織	笹川平和財団汎アジア基金	木村 汎	袴田 茂樹
10	小林 和男	作新学院大学	袴田 茂樹	羽場久シ尾子
11	金野 雄五	みずほ総合研究所	西村 厚	廣瀬 陽子
12	サルキーソフ, コンスタンチン	山梨学院大学	下斗米 伸夫	袴田 茂樹
13	田畑 伸一郎	北海道大学	林 忠行	望月 哲男
14	田畑 朋子	北海道大学院生	林 忠行	望月 哲男
15	中西 啓種	航空自衛隊	小泉 直美	角田 安正
16	西谷 公明	トヨタ自動車	名越 健郎	袴田 茂樹
17	橋口 桜	筑波大学大学院生	白山 利信	羽場久シ尾子
18	原 暉之	北海道大学	林 忠行	藤本 和貴夫
19	ポダルコ, ピョートル	青山学院大学	袴田 茂樹	藤本 和貴夫
20	松井 秀和	ラヂオプレス通信社	袴田 茂樹	羽場久シ尾子
21	松里 公孝	北海道大学	林 忠行	藤森 信吉
22	松下 智子	在ウズベキスタン日本大使館専門調査員	宇多 文雄	袴田 茂樹
23	松島 芳彦	共同通信	名越 健郎	袴田 茂樹
24	松原 広志	龍谷大学	木村 汎	藤本 和貴夫
25	三浦 信行	国士舘大学	木村 汎	袴田 茂樹
26	吉岡 明子	安全保障問題研究会	木村 汎	袴田 茂樹
27	吉田 衆一	法政大学	下斗米 伸夫	羽場久シ尾子
28	吉田 寿昭	前みちのく銀行	名越 健郎	袴田 茂樹
29	吉田 裕季	立正大学大学院生	柴 宜弘	羽場久シ尾子
法人会員				
30	三井物産戦略研究所ロシア CIS ビジネス推進センター		隈部 兼作	都甲 岳洋

表4 2004年度第3回理事会(2005年1月23日)において承認された2004年度仮決算および2005年度予算(案)
(2004年12月31日現在)

	2004年度予算	2004年度中間報告	2005年度予算案
収入の部			
前年度繰越金	1,297,050	1,297,050	1,425,642
会費(注1)	1,930,000	2,361,000	2,800,000
個人	1,830,000	2,081,000	2,650,000
正会員	1,680,000	1,883,000	2,450,000
院生会員	150,000	198,000	200,000
団体	100,000	280,000	150,000
維持会費	24,000	93,000	24,000
寄付	250,000	248,000	200,000
利息	30	8	30
雑収入	20,000	25,630	10,000
収入小計	2,224,030	2,727,638	3,024,000
総計	3,521,080	4,024,688	4,449,642
支出の部			
大会費	300,000	269,800	300,000
年報発行費	1,000,000	983,532	1,200,000
年報印刷費	1,000,000	1,021,853	1,200,000
年報発行編集費	0	38,321	0
事業費(注2)	25,000	20,000	25,000
学会会議費用	40,000	10,000	40,000
事務局費(事務, 謝礼)	100,000	179,465	200,000
事務用品・コピー代	61,000	59,655	80,000
会議費補助	600,000	320,754	600,000
選挙管理費	0	0	0
会員名簿印刷代	40,000	41,790	40,000
通信費	110,000	97,439	130,000
利息・手数料料金(注3)	30,000	16,611	40,000
予備費(注4)	200,000	0	200,000
支出小計	2,506,000	1,999,046	2,855,000
繰越金	1,015,080	2,025,642	1,594,642
総計	3,521,080	4,024,688	4,449,642

(注1) 2005年度予算の個人会費額の算出は、2004年度の納入状況より、会員総数400名のうち、正会員(350名)70%、院生会員(45名)70%、法人会員60%、寄付昨年並みで試算。ただし会費納入率が80%を超えない場合は、文部科学省や科研の補助が受けられないので、会費徴収率をあげる必要がある。

(注2) 事業費は、JCRESおよび地域研究学会連絡協議会の負担金。(注3)「利息・手数料」は、事務局費に含まれる銀行手数料を郵便振替払込料金と合わせたもの。(注4) 予備費は、大会開催に施設使用料が必要な場合の支出。(注5) 最終決算は、3月31日を持って行われるので、繰越金は現在より60万ほど減少予定。

表5 2004年度第3回理事会(2005年1月23日)において承認された新入会員(五十音順)

	氏名	所属	推薦者	
1	岩崎 一郎	一橋大学	袴田 茂樹	湯浅 剛
2	内田 健二	大東文化大学	袴田 茂樹	藤本 和貴夫
3	宇山 智彦	北海道大学	袴田 茂樹	湯浅 剛
4	枝村 純郎	住友商事	佐瀬 昌盛	袴田 茂樹
5	遠藤 寿一	三菱商事戦略研究所	袴田 茂樹	吉田 進
6	大坪 祐介	CSK ベンチャーキャピタル	河東 哲夫	袴田 茂樹
7	岡本 和彦	東京成徳大学	柴 宜弘	羽場 久シ尾子
8	小田 健	日本経済新聞	江頭 寛	袴田 茂樹
9	笠井 達彦	日本国際問題研究所	袴田 茂樹	湯浅 剛
10	片山 博文	桜美林大学	袴田 茂樹	湯浅 剛
11	加藤 美保子	北海道大学大学院生	天野 尚樹	岩下 明裕
12	加藤 有子	東京大学大学院生	浦 雅春	沼野 充義
13	亀田 進久	国立国会図書館	岩城 成幸	袴田 茂樹
14	亀山 郁夫	東京外国語大学	沼野 充義	袴田 茂樹
15	假屋原 智子	国立国会図書館	岩城 成幸	袴田 茂樹
16	北川 誠一	東北大学	上野 俊彦	袴田 茂樹
17	篠田 研次	外務省	佐瀬 昌盛	袴田 茂樹
18	柴 理子	東京情報大学	柴 宜弘	袴田 茂樹
19	菅原 淳子	二松学舎大学	袴田 茂樹	羽場 久シ尾子
20	杉浦 史和	一橋大学	袴田 茂樹	吉田 進
21	須田 将	北海道大学大学院生	袴田 茂樹	林 忠行
22	瀬川 明成	日本放送協会	袴田 茂樹	吹浦 忠正
23	瀬口 利一	読売新聞	袴田 茂樹	吹浦 忠正
24	高橋 和	山形大学	袴田 茂樹	羽場 久シ尾子
25	ダダバエフ・ティムール	東京大学	袴田 茂樹	湯浅 剛
26	巽由 樹子	東京大学大学院生	沼野 充義	袴田 茂樹
27	田中 義英	日本学術振興会特別研究員	袴田 茂樹	吹浦 忠正
28	丹波 實	日本エネルギー産業研究所	佐瀬 昌盛	袴田 茂樹
29	ドゥーダ・ヘンリク	東京外国語大学	袴田 茂樹	羽場 久シ尾子
30	トマルキン・ピョートル	筑波大学	袴田 茂樹	藤本 和貴夫
31	中沢 純一	住友商事	袴田 茂樹	吉田 進
32	長島 七穂	日本対外文化協会	袴田 茂樹	藤本 和貴夫
33	中谷 昌弘	新潟大学	小山 洋司	富山 栄子
34	中村 健史	慶應義塾大学大学院	香川 敏幸	廣瀬 陽子

35	西村 可明	一橋大学	木村 汎	袴田 茂樹
36	沼野 恭子	東京外国語大学	沼野 充義	袴田 茂樹
37	藤崎 好子	高知大学	五十嵐 徳子	宮本 勝浩
38	古川 哲	東京外国語大学大学院生	沼野 充義	袴田 茂樹
39	本田 登	東京大学大学院生	浦 雅春	柴 宣弘
40	本間 浩明	毎日新聞	木村 汎	袴田 茂樹
41	前田 弘毅	北海道大学	袴田 茂樹	林 忠行
42	黛 秋津	日本学術振興会特別研究員	柴 宜弘	中井 和夫
43	水谷 邦子	芦屋大学	袴田 茂樹	吉岡 明子
44	溝口 修平	東京大学大学院生	岩城 成幸	袴田 茂樹
45	道井 緑一郎	外務省	木村 汎	袴田 茂樹
46	宮川 絹代	東京大学大学院生	浦 雅春	袴田 茂樹
47	武藤 玲子	北海道大学大学院生	天野 尚樹	松里 公孝
48	山田 晃	新潟大学大学院生	小山 洋司	富山 栄子
49	吉田 成之	共同通信	袴田 茂樹	吹浦 忠正
50	輪島 実樹	ロシア東欧貿易会	袴田 茂樹	服部 倫卓
51	渡辺 昭子	大阪教育大学	袴田 茂樹	羽場 久シ尾子

(5) 入会希望者、退会者の承認

2004年度第1回理事会(2004年6月)で44名の、今回の2004年度第2回理事会で30名の、新入会員が承認されました。その結果、会員総数は352名となりました。袴田代表理事からは、さらに会員を増やして会員総数400名を目指すとの決意が表明されました。また海外会員(客員会員)の制度も検討することになりました。なお、希望退会者は、宮内邦子、鶴野公郎、橋本あかねの3名。他に、会費滞納による退会者2名。

(6) その他、本学会とJSSEESおよびロシア史研究会などとの合同大会を企画してみてもどうかという提案を中長期的課題として検討することになりました。

2004年度第3回理事会開催

2005年1月23日(日)、法政大学で2004年度第3回理事会が開催されました。袴田茂樹代表理事の挨拶のあと、理事会では以下の報告および審議が行われました。なお、理事会出席者は26名、欠席14名でした。

1. 報告事項

(1) 第34回(2005年度)大会は、2004年10月の理事会で西南学院大学で開催することがすでに決まっていたが、羽場事務局長より、開催日程が2005年10月15日(土)、16日(日)に決まったことが報告されました。(2) 会誌編集委員会報告では、香川敏幸委員長から、『ロシア・東欧研究』第33号(2004年版)には大会論文5本、投稿論文15本、ノート、書評が掲載されるとの報告がありました。なお、発行費については、2004年度は100万円に抑えられたが、2005年度は120万円程度はかかるとの見通しが指摘されました。

(3) 事務局会務報告では、羽場久シ尾子事務局長より、2005年1月23日現在、会員数350名のところ、本理事会に50名の入会申込みが寄せられているので、合計400名となること、会費納入状況については、5年以上の長期滞納者なし、3年滞納者1名、2004年度会費未納者101名(納入率約7割)とのこと、2004年度決算中間報告および2005年度予算案について、会費値上げと新入会員の増加により収入が50万円ほど増加したこと、会誌発行費を100万円に抑えたがもう少し余裕を持ちたいこと、会員増と活動の活性化を踏まえて、2005年度予算では会誌発行費を120万円、事務費を20万、支出を30万円増としたいとの報告がなされました。

(4) その他として、学術会議・経済政策研究連絡委員会報告として溝端佐登史理事により、学術会議改編の現段階と、3月8日経済政策研究連シンポジウムについての報告、学術会議経済学科学研究費審査員の要請があり、1名推薦したこと、日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)への代表を宇多文雄理事(前代表理事)から袴田代表理事へ交代すること、外国人会員に関連する会員規定の改正、他学協会との共同活動、学会ホームページの英語版を作成すること、などについて報告が行われました。

2. 審議事項

(1) 第34回(2005年度)大会の企画について、共通論題のテーマを「スラブ・ユーラシアにおける新しいアイデンティティ」(案)とすること、企画委員を、上垣彰理事(開催校代表)、上野俊彦理事、小澤治子理事、羽場久シ尾子理事(事務局)、皆川修吾理事(委員長)、中津孝司理事、沼野充義理事、宮本勝浩理事とすること、が決まりました。

(2) 入会希望者51名の審査が行われ全員承認されました(1名の塚承認を含む)。

(3) 2004年度決算中間報告および2005年度予算案が承認されました。

(4) 会費について、大会時の理事会で入会が承認される新入会員について、当該年度の会費を

支払うことについて問題提起がありましたが、大会報告、会誌、ニューズレターなど、当該年度の会員としての権利を享受しうるので、従来通り、当該年度の会費を支払ってもらうことが確認されました。

また、定収入がなく生活面で困難しているが、学会活動を強く希望する会員について、何らかの会費減免措置を考えることが承認されました。

(5) その他、入会申込書を、将来的には、PDFファイルではなく、Wordファイルでダウンロードできるようにする、もしくはコンピュータ画面上から書き込めるようにすること、入会申込書の推薦者名は、推薦者の承認があれば自筆でなくとも構わないということが決定されました。

『ロシア・東欧学会年報「ロシア・東欧研究」』原稿募集

論文、研究ノート、書評、資料紹介の原稿を募集しています。2005年度の応募締切は9月15日、原稿締切は11月30日です。そのほか詳しいことはロシア・東欧学会ホームページの会則・諸規程のページないしは年報巻末の「投稿規程・執筆要領」をごらん下さい。

投稿申込先・原稿送付先

ロシア・東欧学会会誌編集委員会
〒252-8520 神奈川県藤沢市遠藤5322
慶應義塾大学藤沢キャンパス総合政策学部
香川敏幸研究室(505) 気付
Tel & Fax: 0466-49-3491;
E-mail: kgw@sfc.keio.ac.jp;
URL: <http://www.sfc.keio.ac.jp/~kgw/>

ロシア・東欧学会事務局

〒102-8160 東京都千代田区富士見町2-17-2
法政大学市ヶ谷校舎ポアソナード・タワー16階
羽場久シ尾子研究室気付
E-mail: russia-ee@side.pobox.ne.jp
URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/roto/index.html>
Newsletter およびHP作成担当: 上野 俊彦
E-mail: uenot@mc.neweb.ne.jp